

既知情報とは何か

——文脈指示項目の機能——

安 武 知 子

1. はじめに

英語には文脈指示項目が豊富である。定冠詞、直示詞、代名詞その他の代用形式、固有名詞等が到るところに存在し、それらを含む文と先行文脈とのつながりを示している。下記(1)―(5)のイタリック体の部分はすべて文脈指示項目である。

- (1) *The* victory is *ours*.
- (2) *George* came.
- (3) *That* was nice of *him*.
- (4) *He's* *such* a bore.
- (5) *I* speak *Chinese* and *so* does *my* sister.

これらの文を発する人は、*the victory* と言ったり、*he* と言ったりするとき、その指示する事物が具体的に何であるのか、先行文脈から相手に見当がつくはずだと考えているのである。先行文脈とは、狭い意味の言語上の文脈のみならず、発話の場面の状況や、世界についての語用論的知識のような非言語上の文脈をも含む広義の文脈である。これらの文脈指示項目が何を指すかは、個々の文を文脈から切り離して眺めていただけでは、わからない。文脈指示項目は共通して、それ以外のところに解釈の手がかりがあるのだという信号を発しているのである。

文脈指示項目、なかでも、代名詞、定冠詞の統語上、意味上の機能に関する研究は、伝統的に、明確な先行詞のある場合の照応関係、とりわけ同一指示性の問題にのみ限られてきたきらいがある。最近の語用論的談話研究の進展に伴い、文脈指示の問題にも新しい光が投げかけられるようにな

り、その結果、文脈指示項目は既知(予測可能な、古い、旧)情報を担う典型的要素の一つに数えられるようになった。「既知情報」対「新情報」という概念は、Halliday, Chafe 等によって、また、機能構文論 (functional sentence perspective) の名のもとにプラグ学派の人々によって、様々に用いられてきているが、その定義は学者によってまちまちであり、定説がないのが現状である。これほど直観的に支持される概念でありながら、その定義があいまいのまま、未だ合意に到らないという言語学上の概念も少ない。その原因の一つにメスを入れるのが本稿の目的である。

ここでの出発点は、文脈指示項目を既知情報を担う要素として一括して、それでおしまいというのでは、その伝達機能の説明として不十分であり、かつ、重要な文法現象の見落としにつながるという認識である。具体的考察の対象として取り上げるのは、代名詞の伝達機能、特に、三人称単数中性の *it* と *that*、文(命題)代用形式の *it* と *so* の機能上の対立である。また、後者との関連から主動詞の補文として生ずる *that* 節の性質、機能、種類についても論ずる。結論としては、文脈指示項目の担う既知情報には二つのタイプがあること、それが統語論的、音韻論的形態や分布に反映していること、さらに、その根底には中右(1981)の主張する「既定性」(anaphoricity)という独立の根拠をもった意味原理がここでも働いているという事実を論証することになる。

2. 代名詞の2つのタイプ

英語の代名詞には、次の(6)、(7)の例にみられるような強勢付与に関する対立がある。

(6) Q. Has Pat been CALLED yet ?

A. Pat said { they CALLED *her* TWICE. }
 { *she* was CALLED TWICE. }

(7) Q. Who did they CALL ?

A. Pat said { they called *HER*. }
 { *SHE* was called. } (Gundel, 1980).

(6) と (7) のイタリック体になった代名詞を比較してみると、(7) の文では *HER, SHE* が、文の主強勢を担い、発話の焦点の位置を占め、質問者の問いに対する応答となる情報を提供しているのに対し、(6) の文では、話し手の言いたいことの主眼（焦点）は他のところ（*CALLED TWICE*）にあり、*her, she* は伝達機能上全く余剰的である。既知情報であるからこそ代名詞で表現されているはずであるのに、(7) のような、その文の最も重要な情報を担う用例があるという事実は、どう説明したらよいのであろうか。これは「既知情報」対「新情報」という単一の座標軸では明らかに説明不可能である。

Allerton (1978) は、既知性に関して次の種類分けを行っている。

- (8) a. 構成素の既知性：構成素が（話し手）と相手にわかっていること。
- (i) 代用形によるもの：どの言語形式か。
 - (ii) 定冠詞によるもの：どの指示物か。
- b. ニュースヴァリューに関する既知性：構成素相互間のニュースヴァリューの有無、相対的予測（不）可能性。

Allerton によると、これらの要因は、それぞれ、次の形式で具現される。

- (9) a. 統語論的に：
- (i) 代名詞化
 - (ii) 定冠詞
- b. 音韻論的に：
- 音調の核の位置

ここで、Allerton の与えている但し書きは、(a) (b) の区別が相入れないものではないことを示すものである。すなわち、構成素の（＝統語論的に具現される）既知性と、ニュースヴァリューに関する（＝音韻論的に具現される）既知性とは同時に働くことがある。たとえば、次の文脈において、既知の構成素は代名詞で表されており、かつ、音調の核も来ていない。

- (10) [John's done something to the dining room]

He's PAINTED it.

Allerton の基本的立場は、既知性を「自分の周囲の状況に対する聞き手の意識に関する話し手の判断」に関わるものとして把える点にある。すなわち、ある項目（情報）が既知であるかどうかは、あくまでも相手にとってそれが既知であるかどうかに関する話し手の判断に基づいて決定される、いわば主観の産物であり、本質的に客観性のあるものではないのである。情報構造の分析に、認識論的見解を導入した点は、高く評価されるべきである。

しかし、Allerton の優れた分析にも、二つ問題点がある。しかも、いずれも決定的な問題である。第一に、Allerton の分類によると、(7) の *HER* と *SHE* に対して、次のような矛盾した性格が付与されてしまう。すなわち、これらは統語論的には（代名詞であり）既知項目であるが、音韻論的には（音調の核が来ており）新であるという矛盾した性格を有するという説明に甘んじなければならなくなる。そもそもある一つの要素が、既知であると同時に新でもあるというのは、相入れない二つの性質を合わせもつということになり、つじつまの合わない説明であると言わざるを得ない。第二の問題点は、構成素の既知性は統語的に具現され、ニュースヴァリューに関する既知性は音韻的に具現されるという二分法が経験的に正しくないという事実である。確かに、(6) と (7) における強勢付与の対立はニュースヴァリューの有無に関するものと考えることができるし、英語におけるニュースヴァリューの有無をマークする典型的な方法が強勢の付与であることは否定されるものではない。しかし他の手段もあるのである。

強勢の付与以外に、ニュースヴァリューの有無をマークする方法として、まず第一に挙げられるのは、三人称単数中性の代名詞 *it* と *that* の対立である。Gundel (*op. cit.*) の指摘によると、次の (11) と (12) の発話における *it* と *that* の伝達機能は等しくない。

(11) I'LL get it.

(12) I'LL get THAT.

この二文の発話される状況は、たとえば、次のように異なっている。電話

が鳴っていて話し手がそれに出ようとするのであるが、もし、そのとき誰か他の人が出ようと腰を浮かしているのが目に入ったならば、(11)の方を、また、誰も電話に出ようとするそぶりが見えないときには、(12)の方を発話するということになる。すなわち、*it* と *that* は相補分布の関係にあり、伝達機能上、既に話題 (topic) として確立しているとみなされるものに言及する余剰的要素の位置には *it* が、発話の焦点を成しているニュースヴァリューのある位置には、*that* が生ずるというしくみになっているのである。¹ 第二に、これと平行的に、命題に言及する三つの代用形 *it* と *that/so* の間にも相補分布の関係が存在するのであるが、それについては、第5節において詳しく扱うことにする。

ニュースヴァリューのない項目のマークの仕方、形態としての表わし方は、言語により異なっている。ポーランド語、アイルランド語のように短縮代名詞 (short form clitic pronouns) を用いる言語もあれば、中国語、日本語、スペイン語のように、いわゆるゼロ代名詞を用いる言語もある。² (13) と (14) を比較してみよう。

(13) わからない。

(14) それはわからない。

(13) は日本語の典型的なゼロ代名詞の例である。わかり切った、なくても相手に誤解を与えない、すなわちニュースヴァリューのない要素は日本語では顕現しない。(14) のように文脈指示項目が具現されるときには、それは、特別な伝達機能を有していると解釈される。(13) と (14) の意味はけっして等価ではないのである。

以上の考察から、Allerton の一見緻密にみえる分類の不備³ が明らかになった以上、出発点に立ち返り、代名詞の担う既知情報には二種あるという認識に立って問題を整理し直す必要がある。表層構造において、この二種類の既知情報が統語論的あるいは音韻論的に上記 (6) — (7), (11) — (12), (13) — (14) の対になった文に現れているような、相補分布を成す異形態として具現されることは判明した。次に問題となるのは、この二種類の既知性の弁別的特性は何なのかという点である。次節では、二種類の既知性のそ

それぞれの特性について、その区別のもとにある意味特性を中心に考えてゆく。

3. 既定性 (anaphoricity)

前節で論じた代名詞の担う二種類の既知情報の性格についての、概括的説明を暫定的にまとめると次のようになる。

(15) 既知情報：それが何を指すかが、発話の時点において談話の世界の中から復元可能であると話し手が判断している情報。次の二種類がある。

(i) わかり切ったもの、言わなくても相手にそれとわかると考えられるもの。伝達機能上は全く余剰的であり、ニュースヴァリュエーションのないもの。

(ii) 明言する必要性のあるもの。発話の焦点の位置に義務的に生ずる。ニュースヴァリュエーションがある。

(15) の説明から、何となく見えてくる (i) と (ii) の弁別的特性は、一言で言うならば、次のようなものである。すなわち、両者は同じく既知情報ではあっても、(i) のタイプは談話の世界の中で既に確定した情報であり、(ii) の方は、いわば相手に念を押す意味で明言する必要があると考えられる情報である。このように考えるならば、ここで働いている弁別素性の本質がだんだん明らかとなってくる。

この現象の解明には、中右 (*op. cit.*) の提唱する「既定性」(anaphoricity) という意味原理が有効であると思う。中右の与えている「既定性」の定義は、次のようなものである。

(16) ある事柄の知識 (概念, 命題) が、発話の時点に先立って、あらかじめ確定した話題として、話し手の意識のなかにあるとき、その知識は既定的 (anaphoric) である。

既定性は、多様な統語論的現象の根底においてはたらいっている意味原理である。たとえば、取り出し (extraction) 現象や、主動詞の補文として生ずる **that** 節に関する様々な変形論的現象に既定性は決定的かかわりを

もっており、独立の根拠をもつ原理であることが論証されている。

中右自身は既知性には論及していないし、既知性と関連で既定性を論じている訳でもない。本稿の企図は既定性と既知性とを組み合わせることにより、代名詞、広くは文脈指示項目のもつ一見複雑な機能の簡潔なすっきりした説明を目指すところにある。既定性と既知性とはまことに紛らわしい命名であるが、致し方がない。もとの概念自体が紛らわしいのである。しかし、両者が明白に異なる別個の概念であることは本稿における上記の考察からも明らかである。従来 of 既知性に関する研究の限界もこの点に関する因数分解がきちんと行なわれていなかったところに最大の原因がある。二種の既知情報について、既定性の概念を因数分解して抽出すると、(15 i) のタイプは「既定的」(+ *anaphoric*) な既知情報、(15 ii) のタイプは「非既定的」(- *anaphoric*) な既知情報という弁別が可能となる。つまり、二種の既知情報は「既知的」(+ *given*) という素性を共有しており、その上で「既定性」という素性については、一方はプラス、他方はマイナスの価を有しているのである。

次に、表層における具現形態に関しても、同様に新たな納得のゆく説明が可能かどうかの問題となる。答は然りである。二種の既知情報が、いずれも代名詞等の文脈指示項目という形式で具現しているのは、とりもなおさず、これらが「既知的」という素性を共有している証拠である。また、音韻論的、あるいは統語的に目立たない形で表される方が既定的で、目立つ形で表される方が非既定的であるというのも我々の直観を満足させるものである。既に確定した、したがって、言わないでもそれとわかると判断されるものは新たに明言する必要性に乏しく、一方、未だに確定していないと判断されるものは、相手にちゃんと通じたと確信できるまで強く主張したいところであるからである。

具体的に (6), (7) の例に照らし合わせてみると、(6) の *her, she* は、既定的既知情報を担っており、イントネーションの核を受けない代名詞の形をとっている。それは、これらの項目が、談話の世界の中で既に確定した情報を担っているためである。それに対し、(7) の *HER, SHE* には、

イントネーションの核が置かれており、したがって非既定的既知情報を担っていると解釈される。ここで当然予想される反論がある。それは「これらは同文中にある *Pat* と同一指示の代名詞であるから、その指すところは明確であり、指示が確定しているのではないか、それを非既定的とは何事か」という疑問である。しかしながら、このような考え方は、文文法 (*sentence grammar*) の狭い枠内での表面的現象だけに捕われたものであり、伝統的誤謬に落ち入るもとである。伝達機能の面から考えるならば、(7) のような場合の非既定性に関し、次のように合理的説明が可能となる。ここでの *HER, SHE* は質問者の問いに対する返答として求められている情報を提供しているのである。つまり、これらの項目が提供している情報は質問者が一番知りたがっているもの、いわばこの発話の目玉なのである。相手が未だ知らない情報なのであるからこそ、たとえその指示対象が既知であっても、確定していない非既定的情報の形を採用し、力点を置いて発話されるのである。

次に、日本語の場合について同様な観点から検討してみよう。(13)、(14)の例を比較してわかることは、日本語では、既定的既知情報はゼロ代名詞の形で、また、非既定的既知情報は「それ」のような頭在代名詞の形で表層に現れるということである。ゼロ代名詞は上で述べた、既定的既知情報は目立たない形でという原則がまさに極限に達した形態である。日本語における既知情報の統語論的現れについて論ずるとき、まず想起されるのは、助詞「ハ」と「ガ」の対立である。周知のように、「ハ」は既知情報を「ガ」は新情報をマークする役目をしているといわれている。すると、(17) のような場合はどういうことになっているのであろうか。

(17) それが問題だ。

ここでは、既知情報を担う「それ」と、新情報を担う「ガ」が合体している。この一見矛盾した用法の謎を解くカギは、まさしく本論のテーマであるところの、既知性からの既定性の抽出にある。

本論の分析によると、(13) は表層に具現されない連命にある既定的既知情報を表すゼロ代名詞の用いられている例である。(14) は非既定的既知

情報に「ハ」が結びついた形である。この用法は「対照」(contrastiveness)を表すものとして一般に知られているが、この文のもつ「今問題にしている事物の中でわからないのはそれです」という意味合いは、とりもなおさず「それ」の表すものの非既定的既知性に由来するものである。つまり「それ」の指示対象は、今問題にしている事物の中の一つなのであり既知である。しかも、話し手の一番言いたいこと、相手に伝えたい点がそこにあるのであるから、非既定的な扱いを受けているのである。(17)は、非既定的既知情報に「ガ」の結びついた形である。この用法は、「総記」(exhaustive listing)を表わす「ガ」と呼ばれるものであるが「今話題になっている事物のなかで、それだけが問題だ」という意味合いは、「それ」の表す情報の非既定的既知性から発生するものと考えられる。「それ」の指示対象は、先行文脈に登場している事物の中の一つであり、したがって既知ではあるが原理的にあいまいである。他ではない「それ」という意味で非既定的扱いを受けているのである。⁴ そこで次のような説明が可能となる。すなわち、「ガ」は基本的に新情報をマークする助詞であるが、非既定的なものならば既知情報とも結びつく。その場合は「総記」の解釈を受けることになる。このように既定性の原理を用いることによって、新情報標識「ガ」が文字通り既知情報項目である「それ」と結びつくというそのままではつじつまの合わない現象も、まったく自然に、直観に合った形で説明できるのである。

日本語のゼロ代名詞は、「既定的既知情報は目立たない形で」という原則が極端なところまで進んだものであると述べたが、この原則に関して、英語タイプと日本語タイプの、いわば中間に位置していると考えられるのが、第2節で触れた短縮代名詞を有するポーランド語、アイルランド語等の言語である。英語の場合典型的形としてはイントネーションの核がその上に置かれないというだけで、代名詞の形態そのものは変わらないのに対し、このタイプの言語では、既定的な代名詞は、非既定的代名詞を短縮した形をとっており、明らかな形態上の相違が生まれている。アイルランド語の例をみてみよう。

(18) Bhi Sean auseo. Chonaic me e.

was here saw I him

Sean はここにいた。(私は) みた (のだ)。

(19) Q. Bhfuil siad auseo ?

are they here

彼らはここにいますか

A. Chonaic me *eisean* ach ni fhace me ise.

saw I him but not saw I her

(私は) 彼 (の方) はみかけたが、彼女 (の方) はみなかった。

(Gundel, 1980)

同じく三人称単数男性の代名詞の目的格である *e* と *eisean* であるが、前者は既定的既知情報を担い、後者は非既定的既知情報を担うという役割分担がここにみられる。

英語でも、既定的な情報を表す場合には、*he* が [i:] と発音されたり、*her* が [ər] となったり、*you* が [jə] となったりという音韻上の短縮形が現に存在している。このように、程度の差はあれ、「既定的既知情報はなるべく目立たない形で」という原則が汎言語的にみられるという事実は既定性の原理が普遍的なものである証拠を提供するものであろう。

そうすると次に、それでは、英語において、強勢の付与以外の方策として、(11), (12) にみられるような *it* と *that* の対立が存在するのはなぜか、という問題が生ずる。伝統的説明によれば *it* は人称代名詞 (personal pronoun) であり、*that* は指示代名詞 (demonstrative pronoun) であるという区別が述べられて、それでおしまいになっている。しかし、これだけでは、二者の用法の違いは何ら明らかにならない。一般に、指示代名詞の機能は「事物を指示するほか、既述の (ときに後述の) 語句または話の内容をさし示すために使われる」(三省堂新英文法辞典) と述べられる。しかしながら、これはとりもなおさず *it* のもつ機能そのものでもある。しばしば、「*it* は (*that* と異なり) 外界の事物を指示する用法をもたない」という誤解をうけるが、(11) はまさしく外界照応 (exohoric reference)⁵

の例である。*it* と *that* の機能の弁別も、既定性の原理にのっとってはじめて可能になるものである。すなわち、*it* は既定的既知情報を担い、*that* は非既定的既知情報を担うという役割分担があるのである。その傍証として、(12) ではイントネーションの核がまさしく *THAT* に置かれている。それにしても、なぜこの場合に限って異なる語彙項目として具現するのであろうか。考えられる理由としては二つある。一つは、*it* が音韻的に「高母音+無声子音」という強く発音しようにも、どうしようもない形をもっているという事実である。その一方 *that* は「有声子音+低母音+無声子音」という、強く(長く)発音しようと思えばそれが可能な音結合から成り立っているという音韻論的理由である。もう一つは、意味論的に「*that* は *it* に比べより定 (definite) であり、指示する力が強い」(Gensler, 1977) という性質の活用である。これは、*that* が元来もっている、直示的 (deictic) 機能に由来する性質であらう。

4. 名詞代用形式の *it* と *that* の機能的対立

以上の議論を踏まえた上で、*it* と *that* の機能上の違いを具体例に即して検討してみよう。実際にこの二者は、様々な統語論的環境において相補分布を成している。まずはじめに、非特定の (non-specific) 存在文の場合を考えてみたい。たとえば、

(20) John wants to touch *a fish* and kiss $\left\{ \begin{array}{l} it \\ *that \end{array} \right\}$, too.

(Jackendoff, 1972)

(20) の *a fish* の非特定の解釈においては、*it* だけが可能であり、*that* は生じ得ない。非特定のであるということは、特定の指示物がないということであり、この現象は一見したところ、本論の主張すなわち「*it* は既定的、*that* は非既定的」という原則と合入れないもののように思われる。強力な反例のようにみえるが、実はそうではない。非特定の解釈ならば、「魚であれば何でもよい」のである。それ以上の具体的指示の必要はなくそれゆえ既定的取り扱いを受けるのである。

次に総称名詞に言及する場合を考えてみよう。

(21) A: *Iron* gets rusty.

B: $\left\{ \begin{array}{l} It \\ *That \end{array} \right\}$ certainly does. (Allerton, 1978)

(22) A *tiger* has spots. $\left\{ \begin{array}{l} It \\ *That \end{array} \right\}$ eats meat. (Stenning, 1978)

ここでも *it* のみが可能であり, *that* は用いられない。総称名詞の指すものは非特定のであり(「鉄というもの」, 「虎というもの」), 本論の原理に従うと既定的情報を担うものとして分類される。

さらに, 次のような用例に生ずる *it* の既定的性格について検討してみよう。

(23) $\left\{ \begin{array}{l} It's \\ *That's \end{array} \right\}$ oozing oil over here
(Bolinger, 1977; also (24), (25))

(24) I'm climbing down. $\left\{ \begin{array}{l} It's \\ *That's \end{array} \right\}$ too exposed up here.

(25) Come down here in the basement and look at the way
 $\left\{ \begin{array}{l} it's \\ *that's \end{array} \right\}$ dripping water from every pipe. You'd swear
they were leaks, but $\left\{ \begin{array}{l} it's \\ *that's \end{array} \right\}$ just condensation.

(26) A: I'm making something special for dinner.

B: I can tell. $\left\{ \begin{array}{l} It \\ *That \end{array} \right\}$ smells heavenly.

(*it* = "something special for dinner"; or the physical smell;
or "ambient *it*"?) (Gensler, 1977)

(23)–(26) は, (26) のあいまい性を除外して考えると, すべて次の (27)–(28) と同様な, いわゆる ambient *it* の用法である。

(27) $\left\{ \begin{array}{l} It \\ *That \end{array} \right\}$ just started to rain.

- (28) $\left\{ \begin{array}{l} It's \\ *That's \end{array} \right\}$ dark in here.

このような用例には、非既定的文脈指示項目 *that* は生じ得ない。ここで、Ambient *it* によって言及されているものは、ばく然としてはいるけれども、明言する必要がないほどわかり切った、その場の物理的環境あるいは現象であり、つまりは既定的既知情報である。この種の用法に関連して、Bolinger (1977) は「*it* は最大限に可能な一般的意味をもつ名辞であり、*it* は、天候、時、環境など、現実の世界から、あるいは文脈からそれとなく、しかも明白にわかるものをその意味のなかに含み込む」という説明を与えている。これは、くしくも、*it* の指示対象の既定的既知性を明確な形で言い当てたものとなっている。

今度は *that* のみが可能で *it* は生じ得ない環境について検討してみよう。

- (29) A: I come from Osaka.

B: $\left\{ \begin{array}{l} THAT's \\ *It's \end{array} \right\}$ where I come from, too.

- (30) Q. Which do you want?

A. I'll take $\left\{ \begin{array}{l} THAT \\ *it \end{array} \right\}$. (Gundel, 1980; also (31))

- (31) $\left\{ \begin{array}{l} THAT \\ *It \end{array} \right\}$ I don't UNDERSTAND.

- (32) $\left\{ \begin{array}{l} THAT \\ *It \end{array} \right\}$ was the best time.

- (33) Where did you buy $\left\{ \begin{array}{l} THAT \\ *it \end{array} \right\}$, Tom?

- (34) Hurry up, $\left\{ \begin{array}{l} THAT's \\ *it's \end{array} \right\}$ a good girl.

- (35) A long time passed in a silence like $\left\{ \begin{array}{l} THAT \\ *it \end{array} \right\}$ of the grave.

- (36) There is $\left\{ \begin{array}{l} that \\ *it \end{array} \right\}$ about him which mystifies one.

(37) A: I gave her one, they gave him, too.

B: Why, $\left\{ \begin{array}{l} \textit{THAT} \\ \textit{*it} \end{array} \right\}$ must be what he did with the tart,
you know. (Halliday & Hasan, 1976)

(38) Larry had *a hamburger* and $\left\{ \begin{array}{l} \textit{a coke} \\ \textit{coffee} \end{array} \right\}$, and I had *THAT*
(**it, *them, *one, *some*), too. (Channon, 1980; also (39))

(39) Don likes *to ski, to skate, to toboggan and in general to participate in winter sports*. Steve likes *THAT* (**it, *them*), too.

(29)–(39)の環境では、様々な理由から非既定的既知情報を表す *that* が採用されている。まず、(29)–(34)の例において *that* のもっている意味合いは「外ならぬそれ」であり、指示の確認的な意味での特定化が行われている。(35), (36)は、修飾語句を伴った位置に生じ得るのは *that* だけであり、*it* はそのような位置に生じないという事実を示す例である。その理由は、既に確定した、既定的事柄に言及するのであれば、さらにそれに限定条件をつけたりする余地も、必要性も、理由も存在しないからである。(38), (39)は話し手が、自分で直前に述べた事柄に言及する用法であるが、どの代名詞を用いるべきかの決定が難しい、あるいは、全部をひっくり返して言及するためには、一般的意味をもった *it* と *that* 以外はすべて不適切であるという判断があり、しかもその上で、先行詞がちょっと複雑な構造であるため意図するところが相手にちゃんとわかっているかどうか自信がない。そこで非既定的既知情報を表す *that* が選択されているのである。

Channon (*op. cit.*) は、(38), (39)のタイプの *that* の用法に注目し、文脈指示の *that* の性格について次のような特徴づけを行なっている。すなわち「*that* は最大限に無標の(unmarked), ある意味では全能の代名詞である。その根底にある基本的性質は、何ら性質をもたないということである。言い換えると、*that* はまるでカメレオンのように、先行詞がどんな性格をもっているか、変わり身の速さでそれを取り込み、矛盾した性格で

さえも調和させてひくくめ、必要とされる場所にいつでも登場する能力をもった代名詞である」というのである。これはまさに *that* のもつ非既定性を具体的表現で適切に表現している。要するに、先行詞の統語論的また、意味論的性格が不明確で、他の代名詞がすべて生じ得ないところに *that* が登場するのである。他はだめでも *it* ならばよさそうな気がするが、*it* もやはりだめである。なぜならば、*it* の指示対象は、一般的意味をもつものでもあり得るといっても「それとなくわかるもので、しかも明白なもの(すなわち既定的なもの)」に限られるからである。

5. 命題代用形式の *it* と *that/so* の機能的対立

it と *that* は上述のような名詞代用形としての機能以外に、命題の代用形として用いられるという、他の三人称代名詞にはない機能を兼ね備えている。⁶ この用法においても、二者の行動は、著しく異なっている。次例を参照されたい。

(40) A: We should have champagne and caviar at the party
after CLS.

B: $\left\{ \begin{array}{l} \text{THAT's} \\ *It's \end{array} \right\}$ a good idea. (Channon, 1980; also (41))

(41) Fred doesn't want to go, and $\left\{ \begin{array}{l} \text{THAT's} \\ *it's \end{array} \right\}$ the problem.

(42) [The Queen said:] 'Curtsey while you're thinking what to say. It saves time.' Alice wondered a little at this, but she was too much in awe of the Queen to disbelieve

$\left\{ \begin{array}{l} it \\ *that \end{array} \right\}$. (Halliday & Hasan, 1976)

(40), (41) では、*that* だけが可能である。これらは直前の文全体を受けた用法であり、しかも外ならぬ自分または相手の言葉に言及している。にもかかわらず、非既定的と扱われているのは何故か。これは生の文(発話)を直接受けているからである。それ全体を内省的に一つのまとまった概念と

して把握した上での言及ではないのである。つまり、相手にとっても自分にとっても確定したものの意識がその時点ではないからである。発話されたばかりのホット情報に言及しているため、それを内省的にまとめ上げる余裕がない。あるいは、一言でまとめて述べようにも適当な名詞句表現がちょっと見当たらないのである。その一方で、(42)の例では *it* だけが可能である。この指示するところは「(おじぎをしながら考えると時間がむだにならないという) 女王の言葉」である。ここでは (40), (41) とは異なり生の文 ('Curtsey while you're thinking what to say. It saves time' 「言うことを考えている間、おじぎをしていなさい。そうすれば時間がむだにならない」) にそのまま言い及んではない。実際に言われたことの内省的まとめ上げがあるはずであり、明確に把えられるものであるとの意識が、既定的代用形である *it* を採用させているのである。

上の考察から、次の原理が仮定される。

- (43) (i) *it* と *that* は共に命題に言及する用法をもつ。
 (ii) 意味論的に、*it* は既定的命題に言及するのに対し、*that* は非既定的命題に言及する。これは名詞的に言及する場合と平行的である。
 (iii) 統語論的に既定的命題は NP に支配された S (\bar{S}) の形をしているのに対し、非既定的命題は S (\bar{S}) の形をしている。

次の (44)–(48) の例は Bolinger (1977) からの借用である。これらは *it* が他の抽象名詞表現によって置換可能なことを示すものであり、(43 ii–iii) の仮説の正しさを証明するものである。

- (44) I have *it* (I have the word) on good authority that you are to be selected.
 (45) She gave *it* away (gave the game away) that we had played the joke.
 (46) They let *it* be known (let the fact be known) that their next move would be an economic one.
 (47) I intend to make *it* public (make the news public) that I am a candidate.

(48) They bruited *it* about (bruited the rumor about) that arson was involved.

(49) Our interview brought *it* (brought the fact) into consciousness that we had a deep rapport.

命題に言及する代名詞について語るとなると、*so* の役割も無視するわけにはいかない。*so* にもたとえば、下記 (50), (51) の例にみられるような命題を受ける機能があるからである。

(50) Have you got a job? If *so*, tell me where you'll work.

(51) He may come, but he didn't say *so*.

(43) の原理によって命題を受ける *it* と *that* の弁別的区別は明確になったが、それでは、*so* は一体どうなっているのであろうか。*so* の意味論的統語論的機能はどのようなものであり、それらは、*it*, *that* とどのような関係にあるのであろうか。中右 (*op. cit.*) の提唱する文代用形式の *it* と *so* に関する原理は次のようなものである。

(52) *it* は既定的命題に代わる定代名詞なのに対し、*so* は非既定的命題に代わる不定代名詞である。

この原理のはたらきを仮定することによってはじめて次の現象の説明が可能となる。

(53) a. I BELIEVE *it*. (焦点は I believe に: *it* は既定的)

b. I believe *so*. (焦点は *so* に: *so* は非既定的)

(54) I can no longer believe $\left\{ \begin{array}{l} \textit{it} \\ \textit{*so} \end{array} \right\}$ (焦点は I can no longer believe に: *it* は既定的)

だが中右 (*op. cit.*) の場合には、*it* と *so* 以外の文脈指示項目への論及はみられず、したがって同じく命題を受ける機能を有する代名詞 *that* に関する言及はない。

(52) と (43) とを考え合わせると、*that* と *so* が同じく非既定的命題を受けることがわかる。すると、既定的命題を受ける形式は *it* 一つだけであるのに対し、非既定的命題を受ける形式は二つ存在しているということになる。何故二つもあるのかという疑問が生ずるが、実際は二者の統語論上

の分布は同じではない。用いられる環境が異なるのである。この点に関しては次の法則がある。

- (55) i. *that* と *so* は共に非既定的命題 $S(\bar{S})$ に言及して用いられる。
ii. 主語の位置では *that* が、その他の位置では *so* が生ずる。
iii. 主語以外の位置に生ずる *that* は $S(\bar{S})$ の代用形ではなく、NP の代用形である。⁷

(55 ii) の証拠には、(40), (41) の *that* の位置に *so* を用いることはできないし、その一方、(50) の *so* を *that* で置き換えるのも不可能である。

(40') B: * *So* is a good idea.

(41') * *Fred* doesn't want to go, and *so* is the problem.

(50') Have you got a job? *If *THAT*, tell me where you'll work.

さらに、(51), (53 b) で、*so* を *that* に代えると意味が異なる文になるという事実は、(55 iii) を裏付けるものである。

(51') He may come, but he didn't say *THAT*.

(53b') I believe *THAT*.

(51'), (53b') の *that* には必然的に対照強勢が付与され、比較対照の意味合いが伴う。また、(51') で *that* が言及する非既定的既知情報は、直前の文 *He may come* そのものではなく、たとえば、*those (words), such a thing* 等の名詞句で言い換えられる類の情報であると解釈される。(53 b), (53b') の違いについても、たとえば、次のような先行談話に対する反応として考えてみると、

(56) The news will upset Bill.

(53 b) の *so* は、(56) の文そのものに置き換わるものと解釈されるのに対し、(53b') の *that* は、*what you say* あるいは、*the news' upsetting Bill* のような名詞表現の代用をしていると解釈されるという違いがある。

Anderson (1968), Kiparsky and Kiparsky (1970) 以来、文代用形式の可能性の違いに基づいて、次のような文補語をとる動詞の分類が認められている。

- (57) a. *factive (it のみ)*: *know, deny, ignore, doubt, acknowledge, rejoice, conform, regret, forget, resent, mind, etc.*
- b. *propositional (it と so)*: *think, believe, understand, add, assume, guess, wish, imagine, suppose, etc.*
- c. *contentive (so のみ)*: *hope, pretend, complain, say, scream, notice, etc.*

この分類の基になっているのは、次の例にみられるような事実である。

- (58) a. Edwin was convicted of having exhibited himself in a public place, although he vehemently denied *it/*so*.
- b. The president of the republic thinks that he can get away with murder, and his military advisors evidently think *so/it*, too.
- c. You want to know if a mongoose can really outfight a cobra, and I can only say I hope *so/*it*.

既定性の原理にのっとってこの現象を再分析すると、次のような、動詞と文補語の共起制限の存在が判明する。

- (59) a. *factive* な動詞の文補語として生ずるのは既定的命題に限られる。
- b. *propositional* な動詞は話し手の意図が補文の命題に対する自分の態度表明であるときには既定的命題と共起し、一方補文の命題を主張することにあるときには非既定的命題と共起する。
- c. *contentive* な動詞の文補語として生ずるのは非既定的命題に限られる。

Cushing (1972) は、*so, it* の違いを説明するにあたり、主文の動詞に〔± *stance*〕というアドホックな素性を設定したが、この点についても既定性という独立の根拠をもつ意味原理にのっとって再分析が可能である。すなわち、非既定的な *so* は、そこに話し手の力点が来る場合に用いられるのであり、相対的に動詞の伝達機能は弱まる。逆に、既定的な *it* が用いられる場合には、話し手の力点は動詞の方に置かれる。これがまさしく動詞に〔± *stance*〕という区別があるごとくみえるゆえんである。

(43), (55) において、既定的命題は NP に支配された S (\overline{S}), 非既定的命題は単に S (\overline{S}) の形をしていると仮定した。そして、主語以外の位置に生じた *that* は、S (\overline{S}) ではなく、NP の代用形式であると論じた。次の事実、この点の裏付けとなるものである。すなわち、もし、主語以外の位置の *that* が命題の代用形であるならば、動詞と文補語の共起制限に関して同じく非既定的命題の代用形式である *so* と、同じ行動をとるはずである —— つまり、*factive* な動詞とは共起しないはずなのに、実際は、(60) のように極めてふつうに叙実的 (*factive*) な動詞の目的語となり得るのである。

- (60) a. She knows *THAT*.
 b. I doubt *THAT*.
 c. My brother resents *THAT*.

このことは、[*factive* な動詞と共起する既定的命題が NP に支配された S の形をとることと考え合わせると納得がゆく。すなわち、*factive* な動詞の目的語の位置には、統語形態上、(その内部構造のいかにかわからず) NP が来るのである。ここで注目すべき重要な点は、同じく叙実的な動詞と共起するものではあっても、*it* で代用できる文補語の方は意味論的に既定的で、*that* の方は非既定的である。この事実、叙実性と既定性が、似たところはあっても、まったく違った概念であることを示す一つの証拠である。

6. 補文を導く補文化辞 *that* の伝達機能

最後に、補文を導く *that* の伝達機能上の役割について考察してみたい。主動詞の補文として生ずる *that* 節の既定性と非既定性の区別およびその統語論的反映について中右 (*op. cit.*) は精緻な論証を行なっている。結論的にいえば、主動詞の補文として生ずる *that* 節には既定的なものとは非限定的なものがあり、その違いが広範な統語論的現象を説明するための原理的基盤にもなっているというものであるが、ここでは特に、いわゆる、*that* の省略現象に関して提唱されている次の原理に注目する。

(61) 補文化辞 *that* は、その補文の命題内容が非既定的なときにかぎり省略できる。

これにしたがうと、非既定的命題を表すものは *that* を伴うものと伴わないものとに分かれることになる。しかし中右 (*op. cit.*) はこの *that* の固有の機能については何も述べていないし、*that* のある場合とない場合の意味の違いについての言及もみられない。これについて本稿では次のように考える。すなわち *that* はそれが導く補文の命題が既知情報であることを示す役目を果たしている。*that* のない補文は、*that* が省略されたのではなく、元来生じ得ないはずのものなのである。既定的な命題の場合、*that* が義務的である。したがって既定的命題は必ず既知であるということが成り立つことになる。(逆は成り立たない。) 既定性と既知性を組み合わせることにより、次の分類が可能となる。

(62) 統語論的、意味論的に補文 (*tensed S* の形をしたもの) には次の3種が認められる。

1. *that S : S* の表す命題は既定的 (かつ既知的)
2. *that S : S* の表す命題は非既定的かつ既知的
3. $\phi S : S$ の表す命題は非既定的かつ新

Bolinger (1972) は、広範な現象を綿密に検討し、豊富な実例を用いて、*that* 補文に関して、*that* のあるなしによる意味の違いを指摘している。そして、*that* の性格、役割、機能について、その歴史的祖先であるところの指示詞の *that* との意味機能上の結びつきを示すものとして、次の4つを挙げている。

- (63) i. あいまいさを回避する。
- ii. 先行文脈内の先行詞あるいは暗黙の了解事項との結びつきを明示する。
- iii. 客観性をもたせる。
- iv. 心理的距離のある、あるいは形式ばったもの言いとの感じを生む。

個々の実例については、Bolinger (*op. cit.*) を参照されたい。Bolinger

は (63) の一見バラバラな性格について、何らかの意味的に統一された原理の存在を指摘し、卓見を示したが定式化にまでは至らなかった。その意味原理がまさしく既定性と既知性である。(63) の機能すべてはこの二つの原理の組み合わせによる統一的説明が可能である。この点については実例に沿った検証が必要であるが、それについては稿を改めたい。

日本語にも (62) の分類に対応する補文タイプが存在する。

- (64) 1. Sノ : Sの表す命題は既定的(かつ既知的)
 2. Sコト : Sの表す命題は非既定的かつ既知的
 3. Sト : Sの表す命題は非既定的かつ新

次の例文は、N. McCawley (1978) からの借用である。

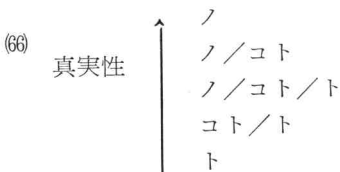
- (65) a. お父さんがお前のことをこんなに心配してやっている

$\left\{ \begin{array}{l} \text{の} \\ ? \text{こと} \\ * \text{と} \end{array} \right\}$ がまだお前にはわからないのか。

- b. 今日、理科の時間に地球が丸い $\left\{ \begin{array}{l} \text{ことを} \\ * \text{のを} \\ ? \text{と} \end{array} \right\}$ 先生から教った(聞いた)。とても信じられないなあ。

- c. 父はもうすぐ世界大戦が始まる $\left\{ \begin{array}{l} \text{と} \\ * \text{のを} \\ * \text{ことを} \end{array} \right\}$ 思い込んでいる。

McCawley (*op. cit.*) は日本語の補文のタイプをそれと共起する動詞のタイプとの関連で論じ、次のような、補文の真実性に関するハイアラキーを提唱している。



ここで、McCawley の提唱する真実性は、段階のある (gradable) ものであり、Kiparsky and Kiparsky (*op. cit.*) の論証する補文の命題の真の前提とは、全く、性格が異なるものである。「ノ」と結びつく補文の真実性が最も高く、その反対に、「ト」と結びつく補文の真実性が最も低

く、「コト」と結びつくものはその中間であるという観察は、つまるところ (64) の仮説を支持するものと考えられる。このことに関しても稿を改めた上で論証することにし、今はただ、それに言及するにとどめる。

6. おわりに

本稿では、既知性、既定性という二つの原理を座標軸に、文脈指示項目わけでも、代名詞、文代用形式、補文化辞の伝達機能を意味論的に検討した。その結果、文脈指示項目が担う既知情報には既定的なものとは非既定的なものとのがあり、それが、統語論的、音韻論的形態の上に反映していることが明らかになった。すなわち、非既定的情報を担うものは比較的顕著な形で、既定的情報はなるべく目立たない形で具現されるのである。この原則が語用論的にも十分な根拠のある普遍的性格をもつことを明らかにしたはずである。

具体的に検証の対象として採り上げた *it*, *that*, *so* の機能について論点をまとめると次のようになる。

(i) *it*—既定的既知情報を担う NP または NP に支配された S (\bar{S}) の代用形である。

(ii) *that* { 代名詞—非既定的既知情報を担う、NP の代用形である。ただし、主語の位置に限り S (\bar{S}) の代用形としても機能する。
補文化辞—補文の命題が既知情報であることを示す標識である。

(iii) *so*—非既定的情報を担う主語以外の位置にある S (\bar{S}) の代用形である。

[注]

1. Gundel (1980) は、この二種類の代名詞をそれぞれ、非指示代名詞 (non-referring pronominals), 指示代名詞 (referring pronominals) と呼んでいる。彼女自身も認めているように、この表現は不適切である。なぜならば

- (6) の *her, she* も, (11) の *it* も, ちゃんと指示機能をもっているからである。ただ独立の指示機能をもたないだけである。
2. Gundel (*op. cit.*) を参照されたい。
 3. この点に関する本稿とは異なる立場からの詳しい考察が安井 (1978: 182-185) に見られる。
 4. 日本語の「ハ」と「ガ」の用法については, Kuno (1972) 等に詳しい論述がみられる。
 5. この点に関しては, Halliday and Hasan (1976) を参照されたい。
 6. 実際には *this* にも命題を担う機能がある。
 7. 主語の位置にある *that* が NP の代用形であることももちろん可能である。

REFERENCES

- Allerton, D. J. 1975. "Deletion and proform reduction," *JL* 11. 213-37.
- . 1978. "The notion of 'givenness' and its relations to presupposition and to theme," *Lingua* 44. 138-168.
- Bickerton, D. 1975a. "Two levels of logical presupposition," *CLS* 11. 48-59.
- . 1976. "Some assertions about presuppositions about pronominalization," *Papers from the parasession on functionalism*. 24-35.
- Bolinger, D. 1977. *Meaning and form*. London: Longman.
- . 1972. *That's that*, The Hague: Mouton.
- . 1979. "Pronouns in discourse," in Givón, T ed. *Syntax and semantics* 12. 289-309. New York: Academic Press.
- Channon R. 1980. "Anaphoric *that*: a friend in need," in Kreiman J. and A. E. Ojeda eds. *Papers from the parasession on pronouns and anaphora*. 98-109. Chicago: CLS.
- Cushing, S. 1972. "The semantics of sentence pronominalization," *Foundations of Language* 9. 186-208.
- Gensler, O. 1977. "Non-syntactic antecedents and frame semantics," *BLS* 3. 321-334.
- Gundel, J. K. 1980. "Zero NP-anaphora in Russian: a case of topic prominence," in Kreiman and Ojeda eds. 139-146.
- Halliday, M. A. K. and R. Hasan 1976. *Cohesion in English*. London: Longman.
- Kuno, S. (久野 暉) 1975. "Three perspectives in the functional approach to syntax. *FUN* 276-336. Also in Matejka ed. 1976

(65.3) 119-90.

- 久野 暉 1978. 『談話の文法』大修館書店。
- Lyons, C.G. 1980. "The meaning of the English definite article," in Van der Auwera, J. ed. *The semantics of determiners*. 81-95. London: Croom Helm.
- McCawley, N.A. 1978. "Epistemology and Japanese syntax: complementizer choice," *CLS* 14, 272-284.
- 中右 実 1981. 「変形と意味の原理」『英語青年』127. 7.1-6。
- Ransom, E. N. 1977. "Definiteness, animacy, and NP ordering," *BLS* 3. 418-29.
- Riddle, E. 1975. "Some pragmatic condition on complementizer choice," *CLS* 11. 467-474.
- Stenning, K. 1978. "Anaphora as an approach to pragmatics," in Halle, M., J. Bresnan and G. A. Miller eds. *Linguistic theory and psychological reality*. 162-200. Cambridge: MIT Press.
- 安井 稔 1978. 『新しい聞き手の文法』大修館書店。